



今回は、AFS でアメリカに留学している関高生の中間報告です。

◇ アメリカ留学の4カ月を終えて

臼田真之

アメリカ留学の開始まで

早いもので、私がノースカロライナ州のシャーロット市に到着してから 4 か月が過ぎました。「ついこの間まで関高にいたのに」という感覚をどこかに残しつつ、アメリカでの留学生活を送っています。「毎日が全力、チャレンジ」というのが、今の私の状況です。

AFS 留学するためには、英語のテストで一定以上の点を取る必要があります。留学先の国によって合格点は異なります。中でも希望者の多いアメリカが一番合格基準点が高く、8 割以上の得点が必要となります。

私は、8 割取れる自信はないにも関わらず、「アメリカ一本の滑り止めなし」で、最初の試験を受けました。結果は不合格。それでもあきらめず受験し続け、3 回目にしてようやくアメリカへの道を勝ち取ることができました。

今、海外留学を目指している人で、「試験が難しいんじゃないか」と心配している人がいたら、「それは杞憂。心配しないで、まずは挑戦してほしい」と伝えたいです。

留学生活で体験したこと

留学して最初に驚いたのは食事についてです。カルチャーショックでした。日本と比べて、シンプルなおおらかな印象を受けました。アメリカ人の友人に、「アメリカ料理といえば何？」と尋ねたところ、意外にも、ピザという意見が一番多く返ってきました。日本人の認識では、ピザはイタリア料理ではないかと思えます。世界中の人々が集まるせいでしょうか。料理ひとつとっても、アメリカはグローバル国家だと思いました。

また、アメリカ人の国民性について、「シャイな日本人とフレンドリーなアメリカ人」というような、ステレオタイプな対比で取り上げられることが多いですが、アメリカの人々はやはり積極性があります。「知らない相手だから」というためらいを感じることは、今にいたるまでありません。米海軍主催の講座を選択した関係で、ダンスパーティー兼ディナーに呼ばれたことがありました。その時もたまたま席が隣になっただけの人が、こちらが驚くほど親しく接してきました。

パーティーの招待状にはパートナー欄があったのですが、特に気にせず出席したところ、参加者のほとんどがパートナーと一緒に会場に来ていたことにも驚かされました。シングル参加は私を含めてわずか 3 名。コミュニケーションスキルに自信のない私にとって、覚悟の必要な事態でしたが、とてもよい経験となりました。

クラブ活動もアメリカのハイスクールライフには欠かせない要素の一つです。文化系のクラブは日本と同様一年中活動していますが、スポーツ系はそれぞれの活動シーズンが決まっています。たとえば、サッカーは秋、野球は春といった具合です。そして、アメリカのスポーツといえば、やはりアメリカンフットボール。私はおおよそのルールを把握しているくらいでしたが、本場で見る迫力は、想像以上にすごいものでした。球技というより格闘技で、アメフト部のレギュラーは本当に学校のヒーローです。競技場への入場はプロのようで、チアリーダーたちの列の真ん中をスモーク付きで通って出てきますし、生徒のほとんどはホームゲームを観戦します。私は、関高では硬式野球部だったので、アメリカでも野球やりたいと思っていましたが、トライアウトは 2 月で、それまでは自主トレを各自するそうです。屋内トレーニングは希望者参加制なので、そろそろ参加したいと考えています。

授業などの学校生活も興味深いです。学校生活は、日本と比較すると自由さを感じます。ただ授業ごとに教室を移動しなければならないのは大変です。授業間の休み時間も 6 分しかないので、最初の頃は校舎内の地図片手に対応に苦慮しました。

大多数の先生は授業中の飲食を許可しています。授業の雰囲気としては、日本と異なり、質問がすごい勢いで飛び交っています。言葉のキャッチボールのスピーディーさは、アメリカならではだと思います。教師と生徒の関係が近いというのも特徴だと思います。敬語のない英語だ

からというのもあるでしょうが、教師と生徒の距離感の近さには、慣れるまで時間がかかりました。

留学生活には苦労はもちろんいっぱいありますが、自分にとってプラスになるということだけは疑ったことはありません。その一番の理由は、何より今経験していることが自分の視野を広げてくれているという実感があるからです。もちろん語学力の向上もありますが、視野を広げることこそが、留学を通して得られる一番大きなものだと思います。帰国するまでに、よりグローバルな視野を持てるよう努めていきたいと思います。

これを読んでくださった皆さんの中から、少しでも多くの方が、留学あるいはグローバル社会へ目を向けるようになってくれたら嬉しく思います。

